

Title	英語構文研究 : 素性とその照合を中心に
Author(s)	大庭, 幸男
Citation	大阪大学, 1997, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/40935">https://hdl.handle.net/11094/40935</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉</a> 大阪大学の博士論文について <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈/a〉</a> をご参照ください。

***Osaka University Knowledge Archive : OUKA***

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	大庭幸男
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	第 13413 号
学位授与年月日	平成9年9月30日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文名	英語構文研究 —素性とその照合を中心に—
論文審査委員	(主査) 教授 河上 誓作 (副査) 教授 中岡 成文 助教授 仁田 義雄

## 論文内容の要旨

本論文は、生成文法理論のミニマリスト・プログラムの枠組みで英語のいくつかの構文を分析したものである。このミニマリスト・プログラムは、Chomsky (1992) にその萌芽が見られて以来現在まで、かなり興味深い急展開を繰り広げつつある。特に Chomsky (1995) では、それまで理論的な基盤をなしていた仮定、原理が大幅に修正、精緻化され、いわゆる「極小主義」がさらに推し進められた。本論文の目標は、第2章から第6章までの各章において英語の構文を一つずつ取り上げ、ミニマリスト・プログラムの枠組みでそれらの構文の特性・分布・構造がどのように分析され、さらに、どのような結果が導かれるかを示すことにある。

本論文はA4判総頁数308頁(本文291頁、参考文献17頁)、400字詰原稿用紙に換算して約924枚に相当する。全体は7章から成る。第1章「ミニマリスト・プログラム」は、本論文の基礎となる Chomsky (1995) の理論を概観する。第2章では「wh 移動構文」、第3章では「多重 wh 疑問文」、第4章では「寄生空所構文」、第5章では「二重目的語構文」、第6章では「小節構文」がそれぞれ取り上げられ、先行研究の綿密な検討と議論のあと、独自の代案が提示される。第7章「結論」では、本論文の成果がまとめられる。

次に各章の論旨を述べる。

第1章は Chomsky (1995) が提唱するミニマリスト・プログラムの概観である。まず1節では、ミニマリスト・プログラムの指導理念が述べられる。ミニマリスト・プログラムによれば、特定の言語 L とは、言語能力という認知システムの初期の状態を具体化したもので、それは、調音・知覚 (Articulatory-Perceptual (A-P)) と概念・意図 (Conceptual-Intentional (C-I)) のインタフェースにおいて、言語運用システムへ「指示」(instructions) を与えると解釈されるようなペア  $(\pi, \lambda)$  を構築する生成手続きと見なされている。その際、 $\pi$  は音声形式 (Phonetic Form) の表示であり、 $\lambda$  は論理形式 (Logical Form) の表示である。こう考えると、ある言語 L の言語表現は  $(\pi, \lambda)$  のペアであることになるが、この  $(\pi, \lambda)$  の表示自体やそれを派生する方法に関しては、次のような原理と条件が課せられる。

- (1) a. 完全解釈の原理 (Full Interpretation Principle)

b. 経済性の条件 (Economy Condition)

c. 出力条件 (Bare Output Condition)

(1 a) の完全解釈の原理は、音声形式と論理形式の表示である  $\pi$ ,  $\lambda$  に課される。これは、「 $\pi$  と  $\lambda$  の表示を構成する要素が、すべて解釈可能で合法的なものでなければならない」という原理である。また、(1 b) の経済性の条件は、「いくつかの派生がある場合、最も経済的な派生が選択されなければならない」という条件である。さらに(1 c) の出力条件は、音声形式と論理形式の表示に課される言語運用等の「言語外」の条件を意味している。この条件は、「言語 L によって与えられた情報が、人間の感覚・運動器官に適合しなければならない」というものである。そして、ミニマリスト・プログラムの課題は、「このような三つの原理や条件を何らかの形で満たすような言語表現 ( $\pi$ ,  $\lambda$ ) を派生するメカニズムを究明すること」であるとされる。

このあと、ミニマリスト・プログラムの理論的枠組みと句構造の派生が概観され、第 2 節で本論文の中心的な役割を果たす素性とその照合の理論が、さらに第 3 節で、本論文に最も関係の深い Attract F という操作の基本的な仮定・概念等が概説され、この操作の適用例が示される。

第 2 章は wh 移動構文の分析である。これは、生成文法理論が誕生して以来絶えず議論の中心となってきた構文で、「主語の島」、「複合名詞句の島」、「付加部の島」など、いわゆる「島の現象」である。本章では、先行研究を古典的なものと比較的最近のもの二つに分類し、それらの分析を概観して、問題点を指摘する。前者の古典的な先行研究としては、Chomsky (1964a) の A-over-A 原理、Ross (1986) の分析、さらに Chomsky (1977) の下接の条件 (I) を取り上げる。また、後者の先行研究としては、Chomsky (1986a) の下接の条件 (II)・空範疇原理・最小性の条件や Cinque (1990) を取り上げる。次に、これらの分析の結果を踏まえて、新たな提案を行う。その提案の内容は、(i) 項と非項に対して「透明な領域」を定義し、(ii) それを論理形式表示における合法的な連鎖条件の中に組み込むことである。その結果、項であれ、非項であれ、その連鎖を形成する構成員が論理形式表示で解釈を受けるためには、透明な領域内に存在していなければならなくなる。もしその構成員が透明な領域内になければ、その連鎖は論理形式の合法的な表示とならず、完全解釈の原理によって排除されることになると主張する。

第 3 章では、多重 wh 疑問文を議論する。この種の疑問文の統語的な特徴の一つは、優位効果を示すことである。Chomsky (1973) の優位性の定義によると、例えば、主語の方が目的語より優位となる。従って、優位効果とは、(2 a) のように優位な who が移動した文は文法的になるが、(2 b) のように優位ではない what が移動した文は非文法的になることを意味する。

(2) a. Who t bought what?

b. \*What did who buy t?

本章では、まず、先行研究として優位条件、空範疇原理による分析、そして wh 句の併合条件などを検討し、問題点を指摘する。次に、Chomsky (1995) の枠組みにおいて、最小連結条件に関わる近接性や等距離の概念を概観した後、それらについての問題点を指摘した上で、それを解釈するための代案を示す。その代案は、非対称的な m 統御という概念によって近接性を定義することである。さらに、最小連結条件によって説明できない多重 wh 疑問文を説明するために、\*表示と素性の照合に基づく wh 句の作用域決定規則を提案する。但し、この作用域決定規則は、この種の問題を解決するための特別な規則ではなく、通常の実験文を解釈するためにどのみち必要な規則である。最後に、why, how, when, where を伴う多重 wh 疑問文を考察し、これらの統語的な現象は、最小連結条件と作用域決定規則で説明可能であることを示す。

第 4 章では、寄生空所構文を考察する。この構文は、主に Taraldsen (1981), Engdahl (1983), Chomsky (1981, 1982, 1986a) 等で議論されてきたが、本章では、特に、Chomsky (1986a) の議論を取り上げる。彼の分析で注目すべきことは、(i) 寄生空所構文に wh 句の移動のほかに空演算子の移動があり、(ii) それに伴い、wh 句の連鎖と空演算子の連鎖から合成連鎖が形成されることによって寄生空所構文が解釈される、と主張されたことである。そこで、この主張を基盤として寄生空所構文を説明するために、本章では次のように仮定する。すなわち、(i) 空演算子の顕在的な繰り上げは、補文標識 Q の解釈不可能な強い素性によって行われる。また、(ii) 空演算子は主節と同じ作用域をも

つので、それを説明するために、wh 句と空演算子と主節の補文標識Qが解釈不可能なR素性を持ち、その照合に基づいて作用域が決定される。この規則は、第3章で提案したものと同一である。さらに、(iii) 寄生空所構文のwh句と寄生空所は同一指示的であるので、これを説明するために、やはり空演算子の作用域を決定するために繰り上げられたR素性に「主要部—主要部一致」・「指定部—主要部一致」を適用して同一指標を付与する。その結果、連鎖合成は、この仮定のもとで束縛条件(C)に違反しない場合に形成されると主張する。

第5章では、二重目的語構文を議論する。Larson (1988) は、二重目的語構文の構造が与格構文の構造にVP内受動化を適用することによって派生されると主張している。しかし、本章では、彼の分析とは反対に、二重目的語構文があくまでも基底にあり、与格構文の構造は素性の照合のために目的語のNPが繰り上げられて派生されると主張する。具体的には、二重目的語構文 [ $v_p$  V NP<sub>1</sub> NP<sub>2</sub>] の構造は、NP<sub>1</sub> と NP<sub>2</sub> がVPを形成し、その主要部には音声的に空であるが意味的にhaveの意味を有する要素eが生じると主張する。この主張は、次の二つのことに基づいている。その一つは、歴史的に二重目的語構文と与格構文を見た場合、二重目的語構文の方が古英語期より頻繁に用いられており、与格構文は中英語期にフランス語の影響によって用いられるようになったことである。もう一つは、Kayne (1984), Larson (1988), Oehrle (1976) などの多くの文法学者が指摘しているように、間接目的語のNP<sub>1</sub> と直接目的語のNP<sub>2</sub> の間に所有関係が存在することである。さらに、この分析の利点として、(i) Barss and Lasnik (1986) が観察した例や、(ii) Pesetsky (1992) の指摘した事実、さらには(iii) Aoun and Li (1989, 1992) で議論されている数量詞句の作用域の非曖昧性を適切に説明することができることを示す。

第6章では、小節構文を議論する。まず、先行研究としてChomsky (1995) とStowell (1987) の分析を検討し、その問題点を指摘する。次に、主節の動詞と小節の述語の間に範疇選択と意味選択の制限があることを示す。このような制限は局部的な関係で捉えられるべきであると主張し、代案としてnull predicate分析に基づいた小節の構造を提示する。この構造はChomskyやStowellの分析の問題点を解決し、さらに、Stowellの示した束縛現象や数量詞句の作用域等に関わる問題も説明できることを示す。

そして、最後の第7章は本論文の結論である。

## 論文審査の結果の要旨

1957年に出版されたN. Chomsky: *Syntactic Structures* は、アメリカ構造主義言語学がそれまで厳守してきた客観主義を排し、Sapir以来、全くその影をひそめていた心理主義を言語の分析に回復させた点で、学界に大きな反響を引き起こした。1963年にこの初期の理論に対応する意味理論がJerrold J. KatzとJerry A. Fodorの共同により開発され、やがてそれがChomskyの統語論と統合されて、1965年に*Aspects of the Theory of Syntax*として出版された。これがいわゆる「標準理論」である。以後Chomsky理論は、仮説形成・演繹・帰納の方法に基づき、発展と修正を繰り返しながら進展し、1970年代前半には「拡大標準理論」、1970年代後半には「改訂拡大標準理論」、さらに1980年代に入ると「GB理論」が主流を占め、1990年代に入って「ミニマリスト・プログラム」が新たに登場してきた。

以上がChomsky理論の大きな流れであるが、Chomskyの言語観についても一言触れておかねばならない。周知の通りChomskyは、「人間と動物の本質的な違いは、人間が言語によって新しい思想を表現し、新しい状況に適切な新しい論述を形成する能力をもつことだ」とするデカルトの見解をとりあげ、人間なら誰でも持つこの言語使用の側面を「言語使用の創造的側面」と呼んだ。そして、この側面を理論上「言語能力」と名付け、言語学の中心課題は「言語能力の解明」であるとした。そして言語能力とは、有限のルールを使って無限の文を生成するような言語生成の内的メカニズムであると考え、この抽象的な言語生成装置を生成文法(generative grammar)と呼んだ。この生成文法は意識と関わりなく自動的に正しい文を生成する知的メカニズムであり、頭脳の中の言語についての知識そのものをモデル化したものである。この生成文法の研究は、おのずから言語習得、普遍文法と関わりをもつが、Chomskyはこうした無意識的なレベルで働く人間の言語能力を、意識のレベルで理論として取り出すことが言語学者の仕事である

と考えた。理論構成にあたっては、高度の精密性が求められることから、言語能力の理論はおのずから抽象度の高い公理系の形式をもつ理論としてまとめられることになる。そしてこの考え方は、「標準理論」から「ミニマリスト・プログラム」に至るまで一貫している。

本論文は、生成文法理論の最新理論であるミニマリスト・プログラムの枠組みを用いて、5つの代表的な英語構文を分析し、この理論の理論的妥当性を検証しつつ、必要に応じて修正を加え、独自の代案を提示したものである。1995年、まだChomsky (1995) がわが国では draft の形で流布しているとき、日本英文学会第67大会 (1995年5月) でシンポジウム「ミニマリスト・プログラム—移動現象をめぐって—」が行われたが、これを組織し、自ら司会・講師をつとめて、この難解な理論を学界に広めるのに大きな役割を果たしたのが大庭氏で、そのときの草稿が第1章、第3章の基になっている。また、第2章、第3章、第5章の議論は、日本英語学会機関誌 *English Linguistics*、日本英文学会機関誌『英文学研究』、『英語青年』等に掲載された論考が基になっている。勿論、本論文の各章の内容は、ミニマリスト・プログラムの枠組みに添って大幅に書き換えられているが、言語観察の質の高さは、すでに学界で高く評価されたものである。大庭氏は、生成文法理論の最先端の成果を熟知した上で、数百の用例の精密な分析を行い、結果として、ミニマリスト・プログラムに基づくわが国最初の本格的な英語構文の研究に成功しているといつてよい。

本論文は、理論の発想・研究方法等における独創性、議論における論理的一貫性と論文としてのまとまり、さらに文献・資料・実例等の実証性、用語・表現等の明晰性、これらのいずれにおいても優れており、特に分析の中心になる第2章から第6章の議論においては、大庭氏の豊かな理論的知識と鋭い言語観察に裏打ちされた見事な言語分析が展開されている。また、各章の構文分析と理論構成とのバランスの良さは高く評価されてよい。こうしたことから、本論文がミニマリスト・プログラムに基づく本格的な構文研究として学界に与える影響は極めて大きく、今後の研究水準を作るにあたっての重要な文献になることは間違いないであろう。本論文の数ある研究成果のうち、特に重要と思われる3点を整理しておきたい。

- (1) 理論の経済性への貢献。例えば、wh 移動現象は今まで特別な条件やその場限りの制約、或いは、複数の概念によって定義された一般原理などによって説明されてきたが、本論文では、普遍文法の一般原理である完全解釈の原理を用いることによって説明され、その結果、理論そのものが簡潔になっている。また、Attract F という操作に関連する「近接性」の概念も c 統御のみで定義され、Chomsky (1995) で仮定されているような最小領域に基づいた複雑な「近接性」の概念や「等距離」の概念は不要になっている。
- (2) 素性照合の有用性。構文が異なれば、それぞれの特徴を説明するために独自の条件や制約が仮定されるのが一般的だが、本論文では R 素性の照合という一つの操作に基づいて、多重 wh 疑問文と寄生空所構文という二つの異なる構文の特性が明らかにされている。
- (3) 空範疇の設定。本論文では、音声的に空であるが解釈上重要な意味をもつ空範疇という最小の理論的構成物を仮定していて、それによって二重目的語構文と小節構文の文法性や統語的な特徴が適切に説明されている。

以上のような本論文の優れた成果にもかかわらず、疑問点が全くないわけではない。例えば、wh 島の現象について、wh 島からの項の取出しの場合、Attract F は緩く適用されるが、付加部の取出しの場合には厳格に適用される。このような適用の差を理論的にどう説明するのか。また、素性について本論文では、特に多重 wh 疑問文と寄生空所構文を説明する際、wh 表現が解釈不可能な R 素性をもつと仮定しているが、その素性が意味的に解釈不可能かどうか、また、素性は理論構築のためとはいえ、一般的に自由に仮定することが可能かどうか、疑問として残る。さらにもっとマクロな観点から、ミニマリスト・プログラムの急展開の中で、従来の生成文法理論で仮定されていた深層構造や表層構造が表示レベルとして存在しなくなったとするなら、言語規則性をもつとされる理論的資格や、生成文法理論自体の理論的位置づけが、そこで多少とも変化をこうむっているということはないのだろうか、といった疑問もわいてくる。

しかしながら、これらの問題点は、一つのパラダイムが相対的評価に基づき変化していくときに必ず生じてくる類のものであり、決して本論文の卓越した成果を損なうものではない。よって、本審査委員会は本論文を博士 (文学) の学位を授与するに十分な価値を有するものと認定する。